

主論文要約

学位申請者 Miikael-Aadam Lotman

題目 The Development of Nishida's Metaphysics: from Pure Experience to Absolute Nothingness

(西田哲学における形而上学の展開: 純粋経験から絶対無へ)

要約

目的と方法

本論文の主題は、西田幾多郎の哲学的思索の発展を形而上学的観点から体系的に再構成することである。周知のように、西田自身は『善の研究』の「版を新にするに当たって」において、自らの哲学の展開を、あたかも紆余曲折を経る旅のように描いている。

純粋経験の立場は、『自覚における直観と反省』において、フイヒテの事行の立場を介して絶対意志の立場に進み、更に『働くものから見るものへ』の後半において、ギリシャ哲学を媒介にしながら、一転して「場所」の概念へと至った。

本論文の中心的な目的は、この旅の終着点ともいえる「場所」(すなわち「絶対無の場所」)という概念が、なぜそれ以前の「純粋経験」や「絶対自由意志」といった諸概念よりも的確であったのかを明らかにすることである。

しかし、ある概念の的確さを評価するためには、その適切性を測る基準が必要となる。本論文では、その基準を明確にするために、B. ラッセルの『ライプニッツ哲学の批判的解説』における方法論から示唆を得る。ラッセルは、ライプニッツの形而上学を一定の公理から論理的に再構成することで、その体系を明晰に描き出した。本論文では、西田哲学の発展を理解するために、以下の二つの形而上学的前提を設定することでこれに準じる。

- **全体性の原理:** 世界は一切のものを含む絶対的全体である。
- **動性の原理:** 世界は動的である。

これら前提によって、本論文の中心的な問いを検討するための視点が定まる。すなわち、「純粋経験」や「絶対自由意志」といった諸概念がこれらの前提を満たし得なかったという事実が、「場所」の概念に至るまでの展開の契機となったと考えられる。本論文では、この過程を追うことで、各概念の的確さを測ることを目的とする。

ただし、本論文の方法論とラッセルの再構成手法には重要な相違点がある。西田哲学の場合、先に挙げた二つの原理は、数学的・論理的な公理ではなく、形而上学的な前提に基づいている。そのため、その展開は論理的導出の過程としてではなく、むしろ

「意味形成」のプロセスとして理解されるべきである。

結論

本論文では、西田幾多郎の形而上学の展開を、世界の全体性と動性の調和という観点から再構成した。その過程で、「絶対自由意志」と最終段階としての「場所」は、ともに『善の研究』において直面した根本的な問題への解決策として位置づけられる。

『善の研究』において、西田は世界の全体性を、あらゆる性質を統一する本体(実体)として捉えた。彼の純粹経験説によれば、実在は意識の質的現象へと還元され、その厳密な統一こそが「純粹経験」、すなわち世界の全体性そのものである。世界の動的性質は多様に解釈されうるが、その核心は論理的対立を伴う緊張関係にある。たとえば、「全体が同時に、同じ意味と場所において青であり、かつ赤である」といった矛盾的な構造が、世界の動的本質を示している。

ここで、西田哲学における根本的な問題が生じる。それは、世界の統一性を「統一的或物」として解釈することに関わる問題である。もし「統一的或物」それ自体もすべての質を結びつける一つの質であるならば、その「統一的或物」という質を統一する、より上位の別の質が必要となる。しかし、このように新たな質を設定しても、それを再び統一するさらに上位の質が求められることになる。つまり、質を統一するためには、常にそれを統一するもう一つの質を仮定しなければならず、以下、無限にこの論理が繰り返され、いわゆる無限後退が不可避となるのである。一方で、この無限後退を回避するために、「統一的或物」はそもそも「質」ではないという立場を採用することも考えられる。だが、西田が主張する純粹経験説によれば、すべての存在や事象は質的に体験されるという原則がある以上、質でない何かを想定することは自己矛盾に陥ってしまう。つまり、「統一的或物」が質であることを否定すれば、純粹経験説そのものが成立しなくなってしまう。ここに西田哲学が抱える根本的ジレンマが明確となるのである。

この問題に対し、西田は『自覚に於ける直観と反省』において、J. ロイスの『世界と個人』の「自己代表的体系」の概念を援用し、「統一的或物」の問題の解決を試みた。しかし、これは無限後退を回避するのではなく、むしろ無限後退そのものを哲学的に正当化するものであった。この解決策の下では、世界は集合論における無限集合の定義と同様の構造を持ち、「自己の中に自己を写す」という体系として解釈される。

ところが、この解決策は新たな問題を引き起こした。もし世界を自然数の集合のような無限集合として把握するならば、その世界は必然的にすべての要素を同時に含まなければならないことになる。すなわち、無限集合はそれ自体として完結した全体性を有する以上、その内部に動的な変化が入り込む余地はなくなり、必然的に静的な世界観へと行き着き、西田が重視する動性の原理と相容れない状況が生じる。一方で、世界が動的であることを認めるならば、そこには絶え間ない生成・変化が伴うため、固定的かつ完結した数学的集合として扱うことはできない。形而上学的な観点から言えば、世界がすでに完成された「実無限」であるならば、それは生成や運動といった「可能無限」とは相容れない。逆に、世界が常に生成の過程にある「可能無限」として捉えられるならば、世界を「実無限」という既に完結した集合と見なすことはできない。ここに、西田哲学が抱える無限性の概念に関する新たな根本的問題が鮮明に浮かび上がるのである。

この問題を克服するために、西田は「絶対自由意志」の概念を導入した。これは、論理法則を超越するという意味において無限である。したがって、世界がこの意味で絶対的に自由であるならば、矛盾する側面を統合し、静的でありながら同時に動的であることが可能となる。しかし、この解決策は最終的に西田自身によって神秘主義として退け

られた。

『働くものから見るものへ』における最終的な解決策は、「統一的或物」の問題を新たな視点から捉え直すことであった。すなわち、すべてを包含する世界は、いかなる性質も有さない本体、すなわち「絶対無」である。この概念を正しく理解するには、まず二種類の否定を区別する必要がある。「相対無」としての否定は「性質の差異」を意味する。たとえば、「このコップは赤ではなく青である」という判断では、特定の色を否定することが別の色の肯定を含意している。一方、「絶対無」としての否定は「性質そのものの欠如」を意味する。たとえば、「自然数は青ではない」という判断では、別の色の肯定は含意されない。

さらに、世界の全体性を理解するためには、内包と外延の区別を導入する必要がある。一般に、いくつかの例外を除けば、ある概念の内包が減少するにつれ、その外延は増大する傾向にある。したがって、特定の対象を概念として捉え、その性質を次第に取り除いていくと、その概念が指し示す対象の範囲は拡大する。究極的には、すべての性質を取り除いた場合、その概念は内容を持たないものとなるが、同時にあらゆる事物を指し示すものとして機能する。このようにして、「絶対無」としての世界は、一切を包含する絶対的な全体である。

最後に、「絶対無」としての世界がどのようにして動的であり得るのかを考える必要がある。この点は、「絶対無」の逆説的な定義である「述語となって主語となることがない」という表現に着目することで理解できる。この定義は、いわゆる「ラッセルの述定の逆説」と関連している。すなわち、「絶対無」を「述定の対象となれない述語」と解釈すると、「絶対無は絶対無であるか？」という問いに対し、肯定しても否定しても、その逆が導かれるという逆説に直面する。本論文では、この逆説を円環的な運動を生み出す原理として解釈した。

以下では、個々の章について、その内容の要約を記載する。

第1章: 西田における「純正哲学」としての形而上学

本章では、西田幾多郎が自身の哲学を「純正哲学」としての形而上学とどのように関係づけ、受容・批判したのかを明らかにする。そのためにまず、西洋哲学における「形而上学」の三つの主要な意味(实在論としての形而上学、第一原理の探究としての形而上学、そして根拠のない思弁としての形而上学)を整理する。その上で、西田哲学と形而上学の歴史的関係を分析し、彼の形而上学観がどのように形成され、発展していったのかを検討する。具体的には、朝永三十郎の『哲学辞典』や紀平正美の論考を手がかりに、西田が自身の哲学を構築する際に理論的基盤として重視した「全体性の原理」および「動性の原理」の形成背景を考察し、西田の思想が同時代の思想的議論とどのように交錯しつつ発展していったのかを明らかにする。

第2章: 形而上学に奉仕する心理学

『善の研究』における「純粹経験」の概念を、世界の全体性と動性という視点から再構築し、その理論的限界を明らかにする。この際、「純粹経験の文法 (Grammar of Pure Experience, GPE)」を導入し、自然言語の文を名詞句へと変換するアルゴリズムを提案する。GPEとは、西田が「純粹経験」の具体例として挙げた「走る馬」を、「馬が走る」という判断以前の経験として捉える見方を形式化したものである。本章では、このGPEを用

いた分析を通じて、「純粹経験」の構造を明確化するとともに、それが統一的或物の問題や「分化発展」などの概念とどのように結びついているのかを検討する。

第3章: 形而上学に奉仕する数学

本章では、無限後退の問題に対処するために、西田がJ.ロイスの「自己代表的体系 (self-representative system)」やJ.G.フィヒテの「事行 (Tathandlung)」の諸概念を導入した過程を分析する。その際に、ロイスの思想的背景を明確化し、特に彼の哲学がF. H. ブラッドリーの『仮象と実在』とどのように関連しているのかを考察する。また、「実無限」と「可能無限」が原理的に両立不可能であることを論証し、ロイスの数学的定義によって世界の全体性を捉える試みが、必然的に静的な世界観を導き、「動性の原理」との齟齬を生じさせることを示す。最後に、この問題がすでに『自覚に於ける直観と反省』および『意識の問題』に潜在的に含まれていたことを明らかにし、その哲学的含意について考察を深める。

第4章: 形而上学に奉仕する論理学

本章では、西田が無限後退の問題に対処するために導入した「絶対無」という概念について、その理論的な展開を分析する。特に、西田の「絶対無」を単なる存在の否定ではなく、「あらゆる性質の否定」として位置づけ、その論理構造を内包と外延という観点から明らかにする。この際、GPEの表現を名辞論理の命題として再構成し、これを用いて「場所の論理」を形式化する。これにより、「絶対無」が世界の全体性をいかに捉え得たのかを明らかにし、「論理矛盾」と「論理逆説」の区別を通じて、世界の動性を逆説的な運動として理解する枠組みを提示する。